様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２８３９

研究課題名（和文）元留学生の留学評価と日本語学習との関連に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of Evaluations of Studies in Japan by Former International Students and the Relation between the Evaluations and Japanese Language Learning

研究代表者
八若　壽美子（HACHIWAKA, Sumiko）

茨城大学・全学教育機構・教授

研究者番号：２０３３４０１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本留学後3～10年を経た元留学生35名のライフストーリーから、元留学生の留学評価と留学が人生に与えた影響を明らかにするとともに、留学中・留学後の日本語学習や使用状況が留学評価に与える影響の解明を試みた。その結果、元留学生の留学評価は肯定的で、留学成果を現在の仕事に活用していることがわかった。留学評価と日本語との関連では、日本語専攻で日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生にとって日本語は留学中・就職後ともに生活の根幹をなす重要な存在であるのに対し、留学中の使用言語が英語の理系博士課程の元留学生にとって研究以外の生活を豊かにし、人的交流を広げることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
留学修了後の「人生」という長期的な視野に立って、個々の元留学生にとっての留学そのものの意義や影響を質的に検証することができた。次に、社会人となった元留学生の視点から日本語学習、即ち「ホスト国の言語を学ぶ」意義と長期的な影響を検証し、準備的な性格が強い大学での日本語教育の実践に新たな方向性を示すことができた。日本語教育を含む留学生教育の改善に向けて具体的な方策を設計することに貢献するとともに、グローバル化の進む日本の地域コミュニティの在り方にも有効な提言ができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines evaluations by 35 former international students of their studies in Japan 3-10 years ago and the influence of the experience on their lives. It also elucidates how their use of the Japanese language during and after studying in Japan affected their evaluation. The results show that the former international students evaluated their study experience favorably, making the most of what they learned in their present work. Regarding the relation between the evaluations and the language-learning situation, the exchange students who majored in Japanese and now do interpretation or translation work at Japanese-related companies regard Japanese as an important part of the foundation of their lives both during their studies in Japan and after starting work. On the other hand, those who studied in a doctoral program in science and used mainly English while in Japan regard the Japanese language as having enriched their lives beyond research and expanded their network in Japan.

研究分野：日本語教育

キーワード：元留学生　留学評価　留学成果　ライフストーリー　日本語学習　日本語使用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

教育のグローバル化が進む中、留学生受入の推進は重要な政策の一つである。受入体制の充実のため、留学生の生活及び意識に関する調査や支援体制の評価が行われている(八若・藤原 2013、八若 2014)。また、留学経験が異文化観や言語観等に変容をもたらす大きなインパクトを持つことが明らかにされてきた(池田 2015)。

しかし、これらは短期間の海外経験や留学中・留学直後の評価に関する研究である。留学時や留学終了時に下された評価は不変のものではなく、留学時の経験をどのように捉え、どのような意義を見出すかにより、過去への認識は変化するものである。そのため、留学経験の評価には、社会人となった元留学生の視点からの検証が不可欠であると考えた。

日本語教育においては、近年「個」への関心の高まりから、量的研究では見えない個々の経験や内的世界に光をあてるライフストーリー研究が注目され、日本語を学ぶことが留学生活やその後の人生においてどのような意義や影響を持つか、個々の語りを通時的、動態的に見ることによって、言語教育の意義を捉え直し、新たな方向性を示す提言がなされている(川上、2014、三代 2015、佐藤 2013)。ライフストーリーとは「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語」であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」（桜井 2012)である。

ライフストーリー研究は元留学生の将来に繋がる意思決定や自己実現の諸相など多様な実態を析出しているが、元留学生対象の研究はまだ少なく、その多くは日本に在住し長期間日本語環境に身を置く漢字圏出身の日本語上級者を対象としたものであった。

近年、留学生受入拡大のため、英語で学位が取得できるコースや英語による授業の提供などが増え、日本語を学習しない留学生も増えてきている。また、日本語を学習したものの留学中・留学後に活用できず喪失してしまうものもいる。さらに、留学プログラムは多様化の一途をたどり、留学期間、留学中の立場、卒業後の進路なども多岐を極めている。日本語教育の新たな方向性を探るためには、日本語学習経験のないものや日本語を保持しないものなども含む多様な元留学生の声に耳を傾け、個々の留学体験とその評価について丹念な解釈を積み重ねていく必要がある。

本研究は、調査対象を大都市と比べると多言語サービスの受けにくい地方大学への留学から 3～10 年程度経過した元留学生とし、出身国、専門、留学目的、日本語学習歴等、異なる背景を持つ元留学生に拡大する。多様な元留学生のライフストーリーから個々の留学評価とその要因や影響を描出すると同時に、語られた留学評価と日本語習熟度や学習状況、使用状況、留学後の日本語保持状態との関連を解明することを目的とする。以上の結果を踏まえて、個々の留学成果を豊かにするために大学における日本語教育はどうあるべきか、また受入国である日本のコミュニティはどうあるべきかについて、新たな方向性を提案する。

２．研究の目的

(1)「対話的構築主義アプローチ」によって形成される調査対象者 35 名のライフストーリーを、「日本留学を経て今ある自分のアイデンティティワーク」として記述し、個々の留学評価とその要因となる経験等を描出する。

(2)個々のライフストーリーの語りから、日本語習熟度、日本語の学習状況、使用状況、留学後の日本語保持状態への言及を抽出し、個々の留学評価との関連を考察し、提示する。

(3)留学後の日本語使用環境の観点から、日系企業等で通訳・翻訳業務に携わる日本語上級レベルの元交換留学生と、研究での使用言語が英語で日本語学習歴が少ない理系博士課程の元留学生の 2 群に分け、「解釈的客観主義アプローチ」によって、留学評価と日本語習得との関連を概念図にし、可視化する。

３．研究の方法

留学修了後 3～10 年を経過した元留学生を対象として、ライフストーリー・インタビューを行った。インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目 を伝え、インタビューでは調査者が必要に応じて質問を加えながら自由に話してもらった。

インタビューは調査協力者の承諾を得て録音し、文字化して分析データとした。インタビューの内容の中から、日本語習得、人的交流、留学成果に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。

ライフストーリーは調査協力者と調査者の相互行為を通じて形成されるという「対話的構築主義アプローチ」(桜井・小林 2005)の立場から、ライフストーリー・インタビューのデータ自体をライフストーリーとして解釈し、留学の評価とその背景、日本語学習に焦点をあてて考察した。さらに、収集された語りの中から留学評価と日本語習得との関連に焦点をあて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下 2003、以下 M-GTA)を用いて分析した。M-GTA は特定の

社会現象の相互作用とそのプロセスを分析するのに適しており、現場の状況に合わせた理論を形成できる分析法として近年幅広い分野の研究で用いられている。収集された語りの共通性にも着目し、「解釈的客観主義アプローチ」を用いて、留学後の日本語使用環境の観点から日本語上級レベル(日本語専攻交換留学生)と日本語非保持/入門レベル(大学院博士課程修了者)の 2 群に分けて、留学評価と日本語学習との関連を概念図化した。

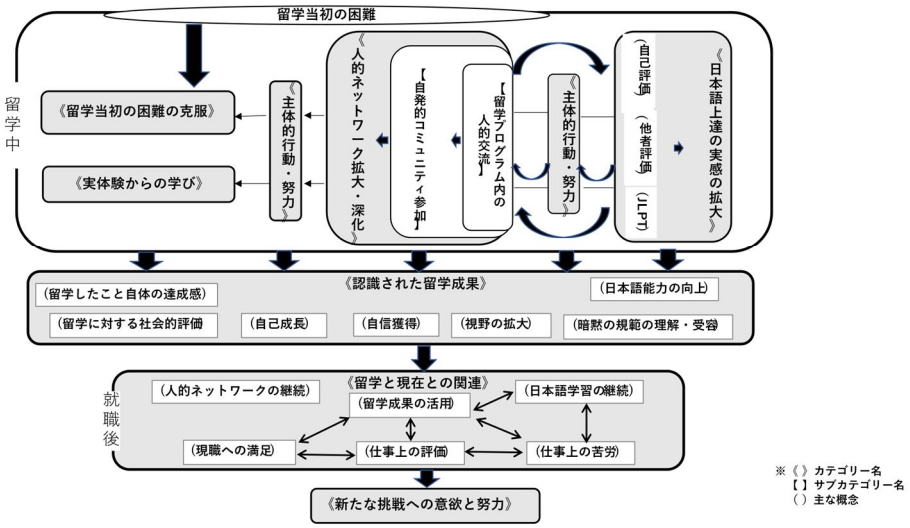
４．研究成果

「対話的構築主義アプローチ」によって、国内外に在住する元留学生 35 名のライフストーリーを「日本留学を経て今ある自分のアイデンティティワーク」として記述し、留学環境や体験は個別的であるものの、日本留学が視野の拡大や自信獲得、専門性の深化など、日本留学が肯定的に評価されていることを示した。また、個々のライフストーリーの語りから、日本語習熟度、日本語の学習状況、使用状況、留学後の日本語保持状態への言及に焦点をあて留学評価との関連を考察した結果、海外在住の元留学生の場合、交換留学生と学位取得を目的とする正規留学生とでは、留学評価は質的に大きく異なっていることが判明した。元交換留学生はその多くが日本語専攻で、卒業後日本関連企業に就職するなど日本語能力を活かした職業に就く場合が多く、日本語の上達は日本留学の成果の 1 つとしてあげられた。それに対し、調査協力者である元大学院留学生は帰国後大学教員として働いており、留学で得たことを自分自身の研究･教育の実践に活用し、学生に伝達している点や、指導教員や研究室内で良好な人間関係を築き、帰国後も教育・研究ネットワークを維持している点が評価されていた。日本語習得に関する評価は専門分野、留学中・留学後の日本語使用状況、日本のコミュニティとの関係などによって多様であった。

そこで、日本語レベルや留学後の日本語使用環境の観点から、母国の日系企業等で通訳・翻訳業務に携わる日本語上級レベルの元交換留学生と、研究での使用言語が英語で日本語学習歴が少ない理系博士課程の元留学生の 2 群に分け、「解釈的客観主義アプローチ」によって、肯定的留学評価の要因と日本語学習及び人的ネットワークとの関連を概念図にし、可視化した。収集された語りの中から肯定的留学評価の要因と日本語学習及び人的交流との関連に焦点をあて、M-GTA (木下 2003)を用いて分析した。

まず、日本語専攻で大学卒業後母国の日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生 9 名を対象とした。調査時に JLPT N2 以上を取得済みで、日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わっていた。専門の日本語を活かし、高度な日本語能力が求められる職業についている群である。分析の結果, 37 の概念が生成され、サブカテゴリリー2 つ、カテゴリー7 つに分類された。生成された概念は図 1 のように結果図にまとめられた。カテゴリーは《》、サブカテゴリーは【】、主な概念は()で示した。矢印はカテゴリー、 サブカテゴリー、概念間の関係を示している。

図1　結果図:　肯定的留学評価と日本語習得・人的交流の関 連



留学中の日本語習得と人的ネットワーク拡大の関連として、他者との関わりやその評価によって自身の日本語の上達を確認し、日本語の上達が他者との関わりを促進するという経験を繰り返して人的交流が拡大・深化していく循環的過程が観察された。(日本語能力の向上)は日本語専攻の者にとって大きな成果とみなされていた。また、日本に来たからこそできた《実体験からの学び》は、(留学自体への達成感)、(暗黙の規範の理解・受容)という成果に大きく関わっていた。

日本語専攻の元交換留学生は就職後も(日本語能力の向上)をはじめ、暗黙の社会規範を知る、

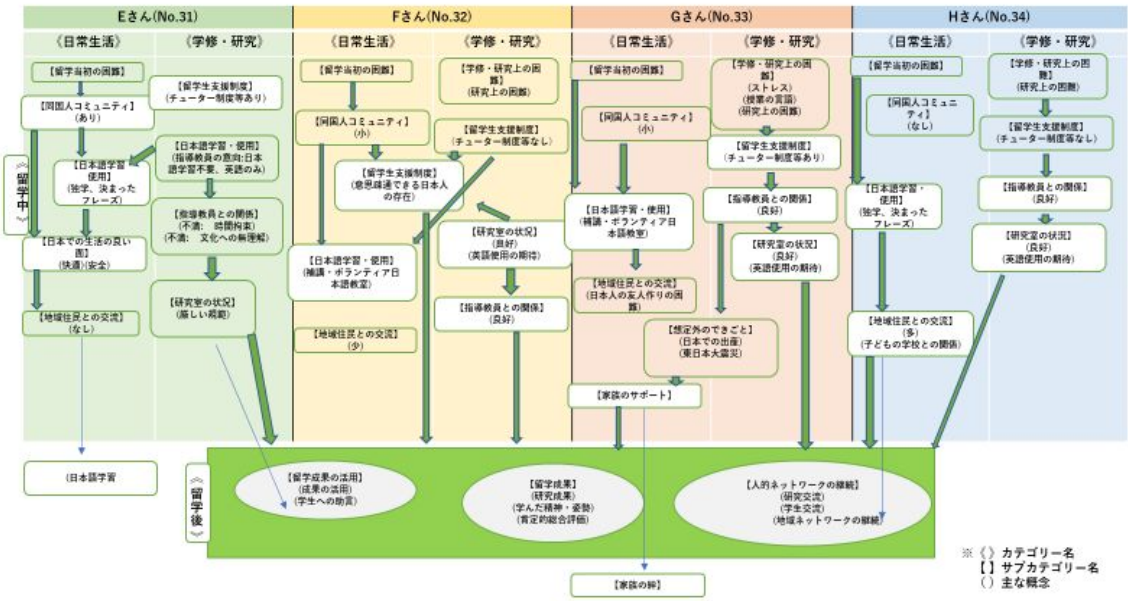
自信獲得などの《認識された留学成果》を十分に活用しており、このことが肯定的な留学評価に繋がったと考えられる。さらに、多くが現状に満足せず、次のステップに向けて行動していることが判明した。働きながら MBA を取得した者、日本の大学院を目指す者、日本での就職を考えている者などキャリアアップを目指す者が多く、全員が日本語能力の向上のため日本語学習を何等かの形で行っていた。日本語専攻の元交換留学生にとっては「日本語」は留学中、就職後ともに生活の根幹をなす重要な存在であることがわかった。

次に、日本の理系大学院で博士号を取得し母国で教鞭をとるインドネシア人大学教員 4 名を対象とした。研究での使用言語は英語で、来日前に入門レベルの日本語学習をしたが、来日後はいずれも正規の授業として日本語学習はせず、補講、ボランティア日本語教室などで勉強したもの、必要に迫られて独学で学習したもの、指導教員の意向で学習しなかったものである。

肯定的評価に繋がる日本語学習・日本語使用、人的ネットワークに関わる概念を 4 名のインタビューデータから抽出し、留学中、留学後に分けて概念図にした。

分析の結果、42 の概念が生成され、サブカテゴリリー16、カテゴリー3 に分類され、図 2 のように結果図にまとめられた。各協力者の置かれた状況は四者四様で個別的であったため、全体としての結果図にはまとめられず各協力者の結果図となった。

図 2　結果図:　肯定的留学評価と日本語学習/使用・人的交流の関係



4 名の結果図から学修・研究面での肯定的評価の要因について以下のことが判明した。

(1)博士課程留学者にとって博士の学位取得及び研究成果が重視され、その結果に満足している。

(2)博士課程留学者にとって、研究成果を左右する指導教員との関係が大きな位置を占める。3 名は非常に良い関係を築けているが、1 名は指導教員を尊敬しつつもその関係には気を遣っている。

(3)研究室の構成員との関係、使用言語、規範などが留学評価に影響を与える。例えば、留学生支援制度は整っておらず、同国人も少なく、日本語も十分ではない場合でも、研究室の教員、大学院生、ポスドクなどがサポートしており、留学後も続く良い関係が築けている。研究室内で意思疎通が可能な言語があればよい。

(4)博士課程修了者は帰国後引き続き共同研究を行う、学生交流を行うなどして交流を継続している。

(5)研究成果だけでなく、留学を通して研究姿勢、日本人の考え方、労働文化、規律なども学んだ。その成果は、授業などで活かす、学生に助言するなどして活用されている

英語で研究を行う理系の博士課程留学生にとって、「日本語」は主として日常生活で必要とされた。4 名の留学生活において「日本語」が果たす役割を検討した。

(1) 同国人コミュニティや意思疎通ができる日本人の協力があれば、日本語ができなくても日常生活にはあまり支障はない。

(2)日本語が学習したいという意志があるのに学習する機会が与えられない場合は不満となる。日本語を使ったほうが研究以外での人的ネットワークの広がりが大きく、人間関係での満

足度が高い。

(3)英語が通じない状況など、必要に迫られた場合、日本語でコミュニケーションをとる努力をする。

(4)研究以外に日本、日本文化を知りたい、楽しみたいという欲求があり、満たされない場合は研究外での満足度に影響する。

以上のように、理系博士課程留学生にとって、日本語学習・使用は必須ではないが、日本語はホスト国日本での研究以外の生活を豊かにし、人的交流を広げる役割を担っていると言える。

これらの結果に基づき、最後に日本語教育、留学生教育に対するいくつかの提案をしたい。

(1) 留学生が抱える問題は個別的で多様であるため、支援体制は多層的である必要があり、その窓口はアクセスが簡単であることが求められる。支援窓口となる機関は多層的なネットワークを持ち、そこを起点として適切な人・機関につなぐ役割を果たさなければならない。

(2) 留学生に対する日本語教育は教室内に留まらず、学習者が多様なコミュニティに自発的に参加できるきっかけを提供する工夫をする必要がある。

(3) 研究・学修面で日本語を必要としない留学生に対しても、本人が希望するならば日本語学習ができる環境と指導教官などの理解が必要である。

(4)日本人の対人姿勢が冷たい、日本人の友人ができないという声が多く聞かれた。母国での「友人感」とのギャップがあることも考えられるが、多様な背景を持つ他者とどう接するか、ホスト国日本側の姿勢を問い直す必要がある。

本研究では、35 名の元留学生のライフストーリーを提示し、留学の意義と日本語習得の関連を探り、肯定的な評価が得られた。しかし、インタビュー協力者を卒業生や知り合いのネットワークを通じて募ったが、インタビューに応じてくれる協力者は「語ってもいい」もしくは「語りたい」という意志の持ち主で、否定的な評価をするものはインタビューに通常応じないということが考えられる。肯定的評価に安堵せず、否定的評価の持ち主の声にも耳を傾けなければならないだろう。

また、本研究の協力者は、主として東南アジア・西アジアなど非漢字圏の元交換留学生、奨学金を得て大学院留学したインドネシアの大学教員であった。留学生の大半を占める中国の留学生、私費留学生、学部留学生についても同様に調査する必要があると考える。今後の課題としたい。

引用文献

池田庸子(2015)「海外留学に関する意識の変化―2004 年度から 2014 年度までのアンケート調査の結果から―」茨城大学留学生センター紀要 13 号, 15-30.

川上郁雄（2014）「あなたはライフストーリーで何を語るのかー日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシーズ』14, 11-27.

木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂.

桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー　質的研究入門』せりか書房

佐藤正則（2013）「留学経験の意味と自己実現についての考察ー元留学生のライフストーリーから」早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会 11, 318-327.

八若壽美子・藤原智栄美(2013)「留学生支援としての新入学部留学生個人面談―4 年間の面談結果の分析―」茨城大学留学生センター紀要 11 号, 63-79.

八若壽美子(2014)「多層的ピア・サポートシステムの構築―留学生支援の枠を超えてー」茨城大学留学生センター紀要 12 号, 41-53.

三代順平（2015）「日本語教育学としてのライフストーリーを問う」『日本語教育学としてのライフストーリー』くろしお出版, 1－22.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 八若壽美子	４．巻 5
２．論文標題 ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生の留学評価	５．発行年 2022年
３．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究	６．最初と最後の頁 65 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八若壽美子	４．巻 5
２．論文標題 ベトナムの企業で働く元交換留学生の留学評価	５．発行年 2022年
３．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究	６．最初と最後の頁 47 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八若壽美子、小林英弘	４．巻 第4号
２．論文標題 タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価―翻訳・通訳業務の場合―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 茨城大学全学教育機構グローバル教育研究	６．最初と最後の頁 119-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八若壽美子、Susi Widianti	４．巻 第4号
２．論文標題 元留学生の日本留学評価　―インドネシアの大学教員の場合―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 茨城大学全学教育機構グローバル教育研究	６．最初と最後の頁 137-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 八若壽美子	4．巻 3号
2．論文標題 再来日した元交換留学生のライフストーリー　―支援される側から支援する側へ―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究	6．最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 八若壽美子	4．巻 2
2．論文標題 元留学生のライフストーリーに見る留学評価-家族と日本で生活する元留学生の場合-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究	6．最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 池田庸子	4．巻 2
2．論文標題 元留学生のライフストーリーにみる留学評価-交換留学から英語教育の道へ-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究	6．最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 八若壽美子	4．巻 1号
2．論文標題 インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価	5．発行年 2018年
3．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究	6．最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 池田庸子	4．巻 1号
2．論文標題 元留学生のライフストーリーにみる留学評価ー研究者夫婦の場合ー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究	6．最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 八若壽美子、池田庸子、Susi　Widianti
2．発表標題 インドネシアの理系大学教員のライフストーリーに見る留学評価
3．学会等名 JALT Study Abroad SIG Online Conference 2020（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 八若壽美子
2．発表標題 タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価―留学期間による比較―
3．学会等名 2020年度日本語教育学会秋季大会（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 八若壽美子　池田庸子
2．発表標題 元交換留学生のライフストーリーに見る日本留学の意義
3．学会等名 2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 八若壽美子　池田庸子
２．発表標題 元交換留学生のライフストーリーに見る日本留学の意義
３．学会等名 2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

『平成 29 年～令和 3 年度科学研究費補助金基盤研究（C）報告書　元留学生の留学評価と日本語学習との関連に関する実証的研究』
https://rose-ibadai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19677&item_no=1&page_id=13&block_id=21

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	池田　庸子 (IKEDA Yoko) (30288865)	茨城大学・全学教育機構・教授 (12101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小林　英弘 (KOBAYASHI Hidehiro)	チュラロンコン大学	
研究協力者	ウィディアンティ　スシ (Widianti Susi)	インドネシア教育大学	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関